



(旧和商)

和商同窓会会報



(新和商)

(発行所) 和歌山市砂山南3丁目3-94 県立和歌山商業高校内 社団法人和商同窓会 TEL 36-6456 (第19号) 平成2年3月1日 (木曜日)

新世紀への胎動の年

巣立ちゆく諸君に

理事長 速水常興



今年「新元号、新時代、九〇年代を目前にした新たな飛躍の年」いろいろないいかたをされた年でした。

高校生活最後の一年を終えられた皆さんも、あわただしいなかじつじつと今年を味わわれたのではないかと思います。とくに、昭和六十四年一月七日、昭和天皇が崩御され、新天皇の即位、新元号平成元年が静かに幕を明けました。その後、国の内外を問わず、政治、経済、社会情勢、すべてのものが

あわただしく激動し、とくに昨年未だ本年にもち越された民族の自主自覚による東欧諸国国家群における自由を求め訴える声、世界の人の耳目をうごかす大事件となり、有為転変、まさに極まりのない一年でもありました。

「卒業に当たって私は、はなむけの言葉として私が昭和十四年春、本校を卒業いたしました。その卒業式の席上、時の校長雨森三三先生の言葉をそっくりそのまま、皆さんに贈らせて頂

きました。それは、「この世のなかには二つのタイプの人間がいる。その一つは、大きな幸せの中にいながら、その中の小さな不幸のみを見つめて、いつもブツブツ不幸せに生きているタイプの人間と、もう一つは、大きな不幸のなかにはいながら、そのなかの小さな幸せのみをみつめて生きているタイプの人間」とある。と言われ

ました。本校卒業以来五十一年にならぬ私は、この雨森校長先生の言葉を時を忘れ思い出

しながら今日まで参りました。私の今までの人生、それはもう色んなことがありました。「小さな幸せに生きる」このことを先づ考えまわりました。苦しむことばかりが人生ではない。「朝の来ない夜はない」

「小さな幸せに生きる」このことを先づ考えまわりました。苦しむことばかりが人生ではない。「朝の来ない夜はない」

「法律関係の道へすすみたい」という希望をもっていました。といいますが、父が関西大学法学部と経済学部を卒業し、ある時期弁護士事務所を開いていたからだと思います。そのため、法学関係の大学へ進学

しようと思っていました。結局、家から一番近い県和商へ進学しました。級友の大半が就職志望でしたが、私は大学受験の希望を持ちつつ、自分なりに大学受験のための勉強をつづけていきました。念願の日本大学法学部に合格できた時の喜びはたまたまありませんでした。受験勉強で得た教訓は「何事も成せば成る」という事でした。たしかに辛い苦しいものですが、それ

れをのり越えた自分に、大きな自信を持つことができました。また、県和商の校風の中で強く学ばれたものに、「奉仕の精神」があります。開校後また数年しかたっていないせいもあって、校舎内外とも整備されていなかった。毎日のように生徒と先生が力を合わせて、草取りやグラウンドの石ひらき、整地作業に精を出しました。旧兵舎の教室もなつかしいもの一つです。「ユウレイの出る便所」や「高い天井からの雨も」も今は思い出の「コマ」です。体育祭のときのヤグラも忘れられないもの一つです。クラス全員を合わせてついでに、体育祭前日は

人生を模索した和商時代

(新一期生)

高垣 勤

昨年11月、母校同窓会本部事務局から、「和商時代の思い出を」と要請がありました。思いあぐねた末、自分の青春時代をふりかえ

るよすがと考へ、ペンをとることにしました。いさ書きはじめようとする、あれもこれもと欲が出てきて、まとめるのに

苦労しました。私は、昭和15年和歌山市中之島で生まれました。幼いころは戦時中というところもあって、両親の知人や親せきを頼って有田郡和歌山



日本大学での校友会 (右が筆者)

が個人優勝するといった具合です。今年の就職状況も非常に良好です。十一月末現在の求人数は男子一、〇四九名(昨年最終六八〇名)、女子では八六一名(昨年最終六八三名)のこと。嬉しい限りです

以上、甚だまよりのない内容となりましたが、魅力ある学校づくりに微力ながら取り組んでまいり所存でございます。同窓会がますますの発展と皆様方のご多幸をお祈り申し上げます。

新第39期評議員決る

平成二年三月卒業生

- 平成二年三月卒業の第三十九期生の評議員はつぎの通りです。(◎印は代表評議員)
- 一組 瀬藤 幸恵
- 和申、毛尾四〇一三
- 二組 井澤 正憲
- 海草郡野上町小畑六五八
- 三組 吉田 加代
- 和申、松江東四丁目七
- 四組 前田真理子
- 海南市別所六〇六
- 五組 廣原 里津
- 和申、手平四丁目六一七
- 六組 後田 優子 ◎
- 和申、宇須三丁目二一五
- 七組 瀧谷 志津
- 和申、南出島五四
- 八組 津山 昌幸 ◎
- 和申、太田一〇三一一
- 九組 岩森千賀子
- 和申、冬野六〇〇七二
- 十組 土橋 弘滋
- 和申、和歌浦東三丁目五
- 十一組 神前 充宏
- 和申、打越町三二六
- 十二組 西川 節子
- 和申、市小路一八〇

平成元年四月、県立和歌山高校から赴任してまいりました。私は五年間まで十七年間、県和商で商業科の一員として勤務させていただきました。たのびながら懐かしい古巣に、帰って来たという感慨をもったのでございます。

あの陽光のように明るく、初夏の涼風のように爽やかな、県和商の校風は健在です。平素は同窓会の皆様には本校教育に、格別のご支援、ご協力を賜わり誠に有難うございます。お陰で本校の環境整備もすすみ、表玄関は、しっかりと落ち着いた同窓会館として新しく建設されました。

このようにとほやがて高校にも及んでくるのが予想されます。また、最近の企業の採用や大学の入試において、生徒の特色ある個性や能力を重視する傾向が強くなっ

切にする学習活動の一層の充実により、豊かな心をもち、たくましく生きる人間育成が望まれています。ともあれ、本校は独自の教育方針に従い、きめ細かい教科学習の指導と、活発な特別活動の指導を両輪

あげていることです。具体的には紙面がないので、次回にゆずりますが、体育部・文化部とも優勝・準優勝・金賞・入賞など次々と獲得して、日ごろの練習努力の成果を発揮してくれていることは、嬉しい限りです

が個人優勝するといった具合です。今年の就職状況も非常に良好です。十一月末現在の求人数は男子一、〇四九名(昨年最終六八〇名)、女子では八六一名(昨年最終六八三名)のこと。嬉しい限りです

以上、甚だまよりのない内容となりましたが、魅力ある学校づくりに微力ながら取り組んでまいり所存でございます。同窓会がますますの発展と皆様方のご多幸をお祈り申し上げます。



愛すべき県和商にかえりて

教頭 土山 道夫

この調査では、小・中学校での登校拒否生徒が増え、ますます深刻であるとのこと、新聞でも報道されてい

てきていることは、情報化国際化に適応するための、社会の方向を示しているようにも思われます。こういった変化に対応できるためにも、生徒の内面に根ざした特性・個性を大

として、生徒の個性・適性に合った学力をつけ調和のとれた心豊かな人間性を育てることに努力している次第です。なかでも、特筆すべきは今年度県内外において、生徒のクラブ活動で好成績を

と天福に増加しました。しかし、求人増加の大部分は県外です。やはり地元就職指向が根強く、女生徒の多い本校では、県内経済の浮上と求人開拓が課題となっております。

また、なかには特技をもった生徒も多く、一輪車競技で世界選手権に出場したり、日本女子自転車競技のジュニアの部で優勝、さらには、県下英語弁論大会の二部門で、それぞれの生徒

《クラブだよ》

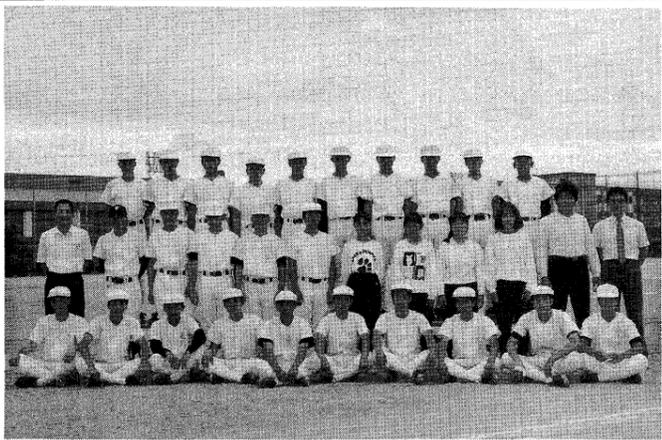
今回のクラブだよは、珠算部と硬式野球部で登場がいました。両クラブとも、かつては全国制覇ないしは甲子園出場という輝かしい栄光を持つクラブです。竹本興次先生(珠算部)と松本透先生(硬式野球部)とともに本校OBに、両クラブの現況と抱負をうかがいました。

二度の全国大会出場 珠算部

現在、部員は総勢五十九名、校内屈指の大団帯です。毎日放課後、新館一階と二階に分れて練習に励んでいます。

が来ました。全国大会では、目標の「三位入賞」こそ成らなかったものの、いま一步のところで、レールアップするまで出来ませんでした。これもひとえに、珠算部OBのみなさんはじめ先輩各位のあたたいご支援のおかげと、心から感謝しております。

和二十八年・二十九年の兩年、栄えの全国制覇をなしとげ、今もなお全国大会フロラムの中にその名が記されています。



甲子園への夢をかけ勢ぞろい—硬式野球部

あの栄光をいま一度

再起に燃える両クラブ

練習に打ち込んでいます。今後とも相変わらずあたたいご指導とご支援をお願いして、近況報告いたします。(竹本 興次)

甲子園へ

あと一歩 硬式野球部

本校野球部が甲子園から遠ざかって、はや三十年あまりの歳月が経ちます。その間には何度となくあと一歩とどこそこまで近づき、涙をのんできました。現在もその悔しさを忘れず毎日の練習に励んでいます。

いま野球部の指導をして



全国大会(仙台)の会場風景—珠算部

工業は、何度も監督として甲子園に出場されています。部員は二年生十名、一年生十名の計二十名の少数ではありますが、一人一人に課題をもって練習に励んでいます。

名簿を手に感無量

旧第19期(大正14年卒) 大西 喜一

和商同窓会名簿昨日落筆仲々予想以上の立派な文献と感無量でした。

九年から十四年までの古き

この秋には十二年ぶりに二次予選に出場し、惜しくも南部高校に敗れ近畿大会出場は逃がしたものの第三

失敗をおそれずに

旧42期卒 川口 新造



戦中、戦後を「和商」で過ごした私にとって人生は「成る」ように成る「と考える」ことだ。

よく人は、過去の栄光が思い出を導き出す。しかし私には、思い出よりも失敗した時の方が今も鮮明に思い出される。

和商出身といえは大半が事務屋(経理マン)である。卒業42年を経た私の人生の中で事務屋だったのは十年たらず、あとは畑違いのパン屋稼業、それも写真記者と内勤は僅か数年、俗にいうサツ回りをしたことがないという変わり者

それだけに失敗ばかりが目につくのだ。

その和歌山市内で発生した火災現場で写真取材材をしようと筋向いにある「ガソリン店」の屋根に

良き少年時代の追憶を改めてかみしめました。

位の好成績を得られました。まだまだ未熟なチームですが、目標をしっかりと持ち、鷲尾、村松先生共ども

ご期待に副えますようにがんばりたいと思います。(松本 透)

失敗をおそれずに

旧42期卒 川口 新造

いる。また「カラー」である。種は「く」になったを入れる種だったというわけである。

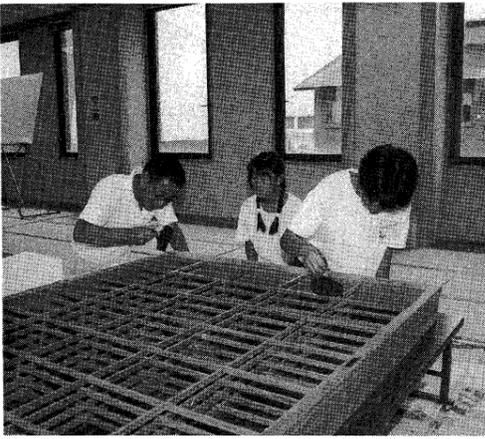
そのカラーフィルムが出初めたこと。新聞社を訪れた松竹のある女優さんのスナップを、若手に

取らせた時のこと。現像しよつと暗室に入ってみると「ない」のである。フィルムが、あの馬鹿、カラーカメラで「ハイパチリ」とニヤけていたのだ。

たが、新聞社のカメラマンともある者が、フィルムを入れ忘れていました。では済まされぬ。

とくに「スイマセン、今のカラーフィルムだったもので」と云い訳がまし

くパチリ、パチリと。今も



入念にノリつけ。尾高先生とハンドボール部員

昔も新聞はモノクロが主役です。

一番新しい失敗談は「和商会館」の障子張り替え作業。八月の訪問時に自分一人でするつもりで請けおったのでしたが、尾高先生のご好意でハンドボール部の生徒たちが障子洗いをさせてしまってくれたこと

と、あとは張り替えをまつばかりとか。ウツカリしていた訳ではないのですが、云い訳はみつともないのでホッかぶりして電話を切ってしまったが、あとで考えると障子に番号をつけることを忘れていました。案の

「他のブロックにさわられては……」。と泊り込んだ人もいました。

痛い思い出を一つ白状しておきます。一年生のとき剣道部の練習していた時のこと。折から、珠算検定を受けに和商に来ていた女生徒に「いいカッコウ」を見せようと、相手に面を打ちこもうとした瞬間、どつた事が逆につき飛ばされ、転倒、後頭部を床板でたたか強打し、4日間意識不明になったことがありました。

またまたなつかしい思い出がたぐさありますが、書き切れません。終りにお世話になった、内藤俊彦校長・森川隆雄教頭・田中貞夫・中村賢一郎・野田聖太郎・増田正己・佐野潔・山田せつ・来田信一郎・中尾殿の各先生に紙上ではありませんが、心から感謝の意をあらわして、むすびをつけたいです。

以上読後所感として……